



特集

異種混濁の世界 東南アジア



二大文明のはざまにあり、大陸部と島嶼部からなる東南アジア。多様な環境で生活を送る人びとに、さまざまなルーツをもつ文化、宗教が入り交じり、多種多様な暮らしが繰り広げられている。今年三月にリニューアルされた展示を中心に、東南アジアの異種混濁の世界を紹介する。



東南アジアの一日



信田 敏宏

民博文化資源研究センター

二大文明のはざままで

中国とインドという大文明のはざまに位置し、その影響を強く受けてきた東南アジア。そこには今も多様な文化と民族が交错し、心躍るような活気あふれる世界が広がっている。

今回の東南アジア展示新構築のテーマとして考えたのは、異種混濁の世界の日常、つまり「東南アジアの一日」である。展示空間を、朝、昼、夕方、夜の四つにわけ、一日という短い時間のなかに展示の品々を盛り込み、その多彩な文化を感じていただきたいというのがねらいである。

一日を味わう

熱帯・亜熱帯の東南アジアは、とにかく暑い。早朝の涼しい

時間、人びとは夜明けと同時に働きはじめ。朝のイメージは、「生業」である。狩猟採集や漁撈、焼畑耕作や水田耕作に関連した道具類に加え、地方農村における近代的労働を象徴する女工を展示している。朝日のなか、いきいきと活動をはじめ人びとの姿を思い浮かべていただきたい。

ぐんぐんと気温が上がり、昼近くになったころ、人びとは一旦仕事を終え、暑さをしのぐ。昼のイメージは、「村の日常」である。高床の家屋で機織りをしたり、囲炉裏でくつろいだり、ときには冠婚葬祭などの儀礼も催される。家や木陰で昼寝などしながら、のんびり過ごすのは、村ならではののどかな風景である。

日がかたむきはじめ、涼しくなると、人びとは再び活動を始める。夕方のイメージは、「都市の風景」である。展示品は、色とりどりの衣装に身を包んだ人びとが活気あふれる町にかけ、買い物を楽しむ姿を想起させる。ムスリム（イスラム教徒）女性のベールや先住民の工芸品など、近年東南アジアで注目されているイスラム化や先住民といったテーマもみどころである。

東南アジアの夜は長い。人びとは屋台や露店に集ったり、影絵などを楽しんだり、寺院の境内でゲームや娯楽に興じる。夜のセクション「芸能と娯楽」では、東南アジアの夜がこもしたす妖しい世界も垣間見ることができる。

熱帯に生きる人びとの活気は東南アジア世界を熱く輝かせている。しかし、その日常が意外なほどおだやかでゆったりと流れていることもまた、東南アジアの魅力のひとつではないだろうか。朝のセクションに新しく設けられた「ゆとろぎスペース」に腰をかけ、そんなのんびりした東南アジアの時間の流れをぜひ感じ取っていただきたい。

一日が終わり、夜の空間を抜けたところには、朝焼けに浮かぶアンコール・ワットを描いた絵画が展示されている。「朝陽アンコール」は、洋画家の大熊峻が描いたものである。新しい一日の始まりを象徴するこの絵画も、新しくなった東南アジア展示場とともに、楽しんでいただければ幸いである。





東南アジア展示場にある仏教寺院の再現展示



靴を脱いで
お上がりください



平井京之介 民博研究戦略センター

それで、帰国したときから、みんぱくで寺院を再現する展示がしたいとずっと思っていた。

今回、実現するにあたり、チェンマイ国立博物館館長のニタヤーさんに協力を依頼した。彼女は以前からの知り合いで、仏教美術の専門家である。

寺院の中心はもちろん仏陀像だ。タイらしい、ピカピカの真ちゅう製仏陀像がよいだろう。観客にインパクトを与えるように、最初はなるべく大きなものと考えたが、最終的に一メートル程度のものを選んだ。座って見上げたときに、仏陀像とちょうど目が合うようにするには、コーナーの広さを考えると、これくらいがバランスがよい。仏陀像の国外もち出しにはタイ政府の許可が必要なのだが、これはとても簡単だった。北タイ地域でこの許可を出すのはチェンマイ国立博物館の館長、つまりニタヤーさんだったからである。

苦労したのは、仏陀像を載せる台座の収集である。蓮を様式化したタイ独特のデザインなのは日本で手に入らない。現地ではコンクリートで作りにすることが多く、既製品を売っていない。ニタヤーさんのとりなしで、なんとか展示業者に作ってもらうことができた。

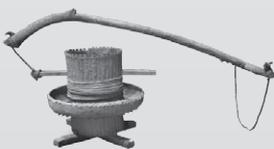


真ちゅう製の仏陀像
標本番号 H0276217

台所のカミさまが いる展示場

かしなが
まさお
榎永 真佐夫

民博研究戦略センター



なに族の台所？

東南アジア展示場に、山地民の高床家屋にある台所を再現した。これがなに族のものかと言われると、即答できない。

囲炉裏、火棚、食器棚、調理具類の多くは、ベトナム、タインホア省の白タイの村における収集品である（同じ集団のラオス側にいる片割れが、赤タイを自称しているからややこしい）。しかしそれは、一九九〇年代のディエンビエン省の黒タイの家屋をイメージして配置している。だから囲炉裏端の女性にはラオスのタイ・ワット



「村の日常」セクション、囲炉裏の再現展示

の衣装が着せてある。タイ・ワットはベトナムでは黒タイに分類されるからである。ついでに、女性が腰かけている籐椅子は東南アジア大陸部で民族をこえて広く使用されるもので、囲炉裏の収集地に近い白タイの村で得たから白タイが作ったとは限らない。ザオ（瑶族）やムオンかもしれない。さらに食器棚も、一九八〇年ごろかベトナムの都市部から普及したタイプで、それを器用に真似て現地の村人が組み立てたものだ。



蒸しあがったばかりのおこわを主食にしているタイ系民族は多い。筆者の大好物でもある。2008年、ベトナム、ディエンビエン省



台所のカミさまの依り代

さて、台所で一番大事なものは、五徳の役割を果たす三つ石である。

マイチャウにあるタイ族文化博物館に一時保管していた囲炉裏を取りに行ったときのことを思い出す。館長が「これが一番、大事だよ」と笑いながら、頭陀袋を倉庫から引っ張り出してきて、乱暴にひっくり返した。ゴロン、ゴロンと転がり出たのは、熱し重さに

うまくいったか？

こうしてできた寺院コーナーだが、観客には靴を脱いで上がり、寺院の雰囲気を感じてもらいたい。それには仏具一つひとつにキャプションがあるとならぬ。そこでタッチパネルを設置し、そのなかで展示品を解説することにした。わたしの得度式や修行生活の様子も同時に写真つきで紹介している。

タイ仏教寺院の再現はうまくいっただろうか。その答えは、展示をみたタイ人が、なかへ入って礼拝してくれるかどうかにあるとわたしは考えている。

太古に巨人が、「五徳の三つ石」山(写真中央左寄り)に大鍋をおき、コメを蒸したと伝えられる。2013年、ベトナム、ライチャウ省



一年三六五日耐え続け、何代も家族の生活を守ってきた堅牢な石。そんなもので割れ損じはしない。とはいえ台所のカミさまの依り代である。畏れかしこむべきカミさまへの仕打ちに苦笑した。

展示場で囲炉裏を組み立てるとき、この三つ石の置き方には迷わされた。わたしが知る黒タイの囲炉裏では、手前にひとつ、奥にふたつ、石が配置されている。しかし、収集したお宅では手前にふたつ、奥にひとつだったのである。結局、原状を再現してある。

カミさまへの不敬不遜をお詫びしないままではいけない。オープン前日、わたしは祈禱師に扮し、囲炉裏でお供えをおこなった。東南アジアではカミさまも融通が利くはずと、白タイ式と黒タイ式チャンボンで祈禱したのがカミさまの怒りがあったのか、自宅の台所でタマネギを切る際に、包丁で左手の人差し指を切つてケガした。



ヒジャーブがあらわす女性の夢

隠して魅せる

イスラームの教えにより、他人の前では覆わなければならぬ体の部位はインドネシアではアウラットとよばれている。女性信者の場合、大体、顔と手以外がこれに当たると解釈されている。ミニスカートやホットパンツ、タンクトップはもつてのほか、スキニーパンツもタイトなドレスも体の線が見えるので、髪型を工夫してみせることもできない。彼女たちには、おしゃべりは許されないのか。

福岡 正太 民俗文化資源研究センター



ヒジャーブのインナーであるチブット。このタイプは、その形からチブット・ニンジャとよばれる。2014年、インドネシア、バンドゥン



イスラーム・ファッションのお店にて。中央が筆者。2014年、インドネシア、バンドゥン

じつは、そんなことはない。インドネシアで衣料品の市場を訪ねると、かなりの店が女性イスラム教徒のファッション、特に髪を覆うベール（ヒジャーブあるいはジルバブ）や関連する小物を扱っている。ショッピングモールには、人気のイスラームファッションブランドの店が並ぶ。ベールは、女性を縛るものかと思ひ込んでいたが、女性イスラム教徒としての自分をファッションナブルに表現する手段でもあるようだ。

敬虔に、そしておしゃべりに

今、インドネシアの若い女性のあいだで、ヒジャーブ・コミュニティという団体が注目を集めている。ベールをおしゃべりに着こなす若い女性を中心とした集まりだ。二〇一〇年にジャカルタで設

立された。彼女たちは、次々と新しいベールの巻き方を工夫して、それをビデオに録って動画配信サイトで公開したりしている。ほかにも、クルアーンを読む会や各界で活躍する女性の講演会なども開いている。一方、ヒジャーバーズママという、お母さんたちを中心とするグループもある。こちらは家庭をもちながら活躍する女性のファッションを発信している。

イスラームの教えを守りながら、現代インドネシアにおける女性の生き方を探り、インターネットなどのメディアを通じて情報発信を続ける。敬虔かつ有能で、ファッションナブルに自分を表現する女性、彼女たちの活動からは、そうした理想の女性イスラム教徒の像が浮かんでくる。みんながそんな女性になれる訳ではないかもしれないが、それは多くの女性に現代社会を生き抜くための夢を与えているのだから。



「都市の風景」セクション、インドネシアとマレーシアのベール。マネキンも現地のもの

豊かな影絵芝居 —マレーシアのワヤン

戸加里 康子

東京外国語大学非常勤講師



夜は影の世界

影絵芝居ワヤン（正式にはワヤン・クリ）というと、インドネシアを思い浮かべる方が多いかも知れない。しかしじつはマレーシアにも同じ名前の同じような芸能がある。マレーシアではおもに

半島東海岸北部、タイと国境を接するクランタン州を中心とした地域で演じられてきた。

クランタン州の州都コタバ、夜九時。ワヤンの上演小屋には、白いスクリーンが貼られ、色鮮やかな人形の影が映し出されている。真ん中には団扇のような形のポホン・プリンギン。その両脇には「矢の神」とよばれる一対の人形が向かい合い、ポホン・プリンギンの後ろに仙人マハリシが控える。

前座の音楽が終わると、すべての人形がスクリーンからとり払われ、その後再びポホン・プリンギンが映し出される。影は、左右に大きく振られ、揺れ、ワヤンの世界が始まる。ポホン・プリンギンが消えると、マハリシがゆっくりとあらわれ、しばらく歩いた後、真んなかで止まる。そして呪文を唱える。

オーム、オーム、シーシー。プラーシーデイツ……この呪文、じつはマレー語ではない。演者はタイ語だと思ふというが、タイの人に訊いても意味はわからないという。上演に使われることばは、おもにクランタン方言のマレー語だが、ワヤン独特の言い回しがあり、ジャワ語やタイ語の単語も多く混じる。



上：クランタンのワヤンはこのシーンから始まる。2008年、マレーシア、コタバ
下：「芸能と娯楽」セクションに展示されているマレーシアのワヤン人形



白いスクリーンに影を映し出して物語を演じる。2013年、マレーシア、コタバ

芸能は交流で豊かになる

クランタンのワヤンは、ジャワから伝わったという説とタイから伝わったという説がある。碑文

や文献が残っていないため、歴史についてははっきりとしたことはわかっていない。研究者はさまざまな論拠を挙げるが、演者たちはそれほどこだわっていないように見える。彼らのあいだには「クランタンのタイ系住民がジャワからもち返って始めた」という折衷案のような伝承も伝わっている。

伝承の真偽のほどは確かではないが、この地域に伝わる他の芸能と同じように、交易などで伝わった近隣（ときには遠方）地域の文化や芸能を柔軟に受け入れ、クランタンのワヤンは豊かに発展してきたのだからと思う。そしてこれからもそうあって欲しい。



他者と折り合うユーモア

吉田 ゆか子よしだ ゆかこ
日本学術振興会特別研究員(民博)
民博 外来研究員

ムスリムを演じる

バリ島のヒンドゥー教寺院の祭りで、友人のワヤンさんが演じる仮面劇を観ていたときのこと。中盤のコメディシーンが始まると、イスラム帽をかぶったワヤンさんが快活な伴奏曲にのって登場した。彼はおもむろにひざまずき、大げさにイ



イスラム教徒を演じて客の笑いをとるワヤンさん。2010年、インドネシア、バリ島

スラム風の祈りのしぐさをした。ヒンドゥー教儀礼の真つ最中に、イスラム教の祈りをあげるという少々どぎついギャグに、観客たちは少しの驚きを交えながら、笑い声をあげた。

バリは、インドネシア共和国に属する小島である。バリの人口の約八割はヒンドゥー教徒であるが、国全体では約九割がイスラム教徒である。そんなバリのヒンドゥー教徒にとり、イスラム教徒とは、国内で圧倒的な影響力をもち、日常生活のさまざまな場面でもかかわらずにはおれない異教徒である。

異種混淆のトペンの世界

この仮面劇はトペンとよばれ、ヒンドゥー教の各種の儀礼において、そこに集う神々、人間の参拝客、そして悪霊たちを楽しませるために上演される。軸となるのは王や大臣など歴史上の英雄たちの物語である。時代劇であるが、中盤以降は、時事問題や現在の村のゴシップなどがコメディとして盛り込まれる。壮麗な王族貴族の歴史物語と生活感溢れる現代の話題を付き合わせ、そのギャップを楽しむ。こうして儀礼の場に、過去と現在、祖先の世界と我々の世界が交錯するダイナミックな空間が開かれるのである。



外国人観光客の役を演じる。2007年、インドネシア、バリ島

外国人観光客の姿はバリの日常の風景の一部となっているが、彼らも恰好のトペンの題材だ。演者は誇張した高い鼻の仮面をつけ、きよろきよろと辺りを見回し、英語なまりのつたないインドネシア語でナンセンスな物言いをする。米国人研究者ジェンキンスも指摘するように、バリの人びとは、圧倒的なかたちで迫ってくる西欧諸国の影響を、トペンのなかで笑い飛ばし、歴史のなかに消化することで対処してきた。現在、政治的・経済的利害が対立することも多いインドネシアのイスラム教徒とヒンドゥー教徒。その緊張関係のなかで試みられるイスラム教徒の道化もまた、ユーモアをもって彼らとなんとか折り合ってゆく、その方法の模索といえよう。

たんぼ道、女工と僧のすれ違い

平井 京之介ひらい きやうのすけ
民博 研究戦略センター

タイの田舎のたんぼ道。車が一台やつととおれるくらいにのびのびの広さである。朝七時前、出勤途中の若い女性が修行僧の一人に会う。列をなして歩く修行僧たちは托鉢へいくところだ。鉢をもって近隣の村々を歩き、家の前に立つ村人から施しの米やおかずを受けてまわる。

女性は日系の組立工場で働いている。工場は自宅から二〇キロほど離れた工業団地内にある。彼女が乗るバイクは、タイで人気が高いホンダ「ドリーム」。その名のとおり、農家の若者にとっては「夢」の乗り物である。彼女はこれを二年ローンで買い、月々返済している。向こうから僧がやってくるのに気づいた彼女は、その手前で脇に寄ってエンジンを止め、乗っていたバイクを降りた。僧を先におすためだ。



東南アジア展示場入口にある「女工と托鉢(たくはつ)僧」の展示

これにはふたつの意味がある。ひとつは敬意を示すこと。もうひとつは確実に接触を避けること。

僧が女性に触れることは戒律違反。触れたら最後、それまでの修行の成果が水の泡になるからだ。

先住民の店

信田 敏宏のぶた としひろ
民博 文化資源研究センター

近年、東南アジアの先住民は、NGOなどの支援を得て、従来は儀礼や日常生活で使用してきた手作りの腕輪やかごなどを、観光用の商品として市場などで販売するようになった。

マレーシアの先住民オラン・アスリの工芸品は、以前から観光客用のショップで売られているが、その売り上げのほとんどは、仲買人の懐に入ってしまった。制作者の収入は少なかった。二〇〇〇年を過ぎたころ、事態は次第に変化するようになる。

一人のマレー人女性が立ち上げた「グライ・オラン・アサル(先住民の店)」というNGOの協力の下、工芸品を制作したり、このNGOを通じて自らの作品を販売しようとする人びとがあらわれたのである。仲買人の役割を担うNGO「先住民の店」は、利ざやを一切受けとらず、売り上げのすべてを制作者の元に届けられるようにした。

こうしたNGOの活動は、工芸品の制作者の家計を支えるだけでなく、工芸品制作への若い世代の参入も促しており、伝統技術の継承にも寄与する活動になっている。



工芸品イベントで店を出すNGO「先住民の店」。2005年、マレーシア、クアラルンプール

